



■ 疾病と予防接種 (無料)

	疾病の内容	予防接種
結核	<ul style="list-style-type: none"> 結核菌の空気感染によって発症。 国内では、毎年2万人を超える患者が発生しており、大人から子どもへ感染することも少なくない。 結核に対する抵抗力(免疫)は、母親からもらうことができないので、生まれたばかりの赤ちゃんもかかる場合も。 全身性の結核症、結核性髄膜炎になることもあり、重い後遺症を残す可能性も。 	<ul style="list-style-type: none"> BCGワクチン(生ワクチン) 牛型結核菌を弱毒化してつくったワクチン。 管針法といってスタンプ方式で上腕の2か所に押し付けて接種。上腕以外の場所に接種するとケロイド等の副反応が出ることもあるので、絶対に避ける。 接種場所は日陰で乾燥を。10分程度で乾燥。 
ポリオ(急性灰白髄炎)	<ul style="list-style-type: none"> 別名小児マヒ。 ポリオウイルスはヒトからヒトへ感染し、感染した人の便中に排泄されたウイルスが口から入り、のど又は腸で増殖。感染しても殆ど場合は症状が出ず、一生抵抗力が得られるが、ウイルスが血液を介して脳や脊髄へ感染し、麻痺を起こすことも。 ポリオウイルスに感染すると風邪のような症状が見られ発熱、続いて頭痛・嘔吐が出現。感染者のうち稀に麻痺を起こすことがあり、一部の人は永久に麻痺が残存。また呼吸困難で死亡することもある。 	<ul style="list-style-type: none"> 四種混合DPT-IPV(ジフテリア・百日せき・ポリオ・破傷風)ワクチン(不活化ワクチン) I期として初回接種3回(20~56日間隔)、追加接種は初回接種3回終了後に6か月以上の間隔を置いて1回接種。なお、ジフテリア・百日せき・破傷風・ポリオのいずれかにかかった子どもも四種混合DPT-IPVワクチンを接種可。 II期として、11歳~13歳未満で二種混合DT(ジフテリア・破傷風)ワクチンで1回接種。 回数が多いので接種漏れには注意。確実な抵抗力(免疫)をつくるには、決められたとおりを受けることが大切だが、万一間隔が開いてしまった場合は、かかりつけ医に相談。
ジフテリア	<ul style="list-style-type: none"> ジフテリア菌の飛沫感染によって発症。 主にのどに感染。症状は高熱、喉の痛み、犬の吠える様な咳、嘔吐等で、のどに偽膜と呼ばれる膜が出来て窒息死することもある。発病2~3週間後には心筋障害や神経麻痺を起こすことも。 	<ul style="list-style-type: none"> 百日せき菌の飛沫感染によって発症。 普通の風邪のような症状で始まり、続いて咳がひどくなり、顔を真っ赤にして連続的に咳き込むように。咳の後、急に息を吸い込むので笛を吹くような音が出る。通常発熱は無し。 乳幼児は咳で呼吸できず、唇が青くなったり、けいれんが起きることも。肺炎や脳症等の重い合併症を起こし、乳児では死亡することもある。
百日せき	<ul style="list-style-type: none"> 百日せき菌の飛沫感染によって発症。 普通の風邪のような症状で始まり、続いて咳がひどくなり、顔を真っ赤にして連続的に咳き込むように。咳の後、急に息を吸い込むので笛を吹くような音が出る。通常発熱は無し。 乳幼児は咳で呼吸できず、唇が青くなったり、けいれんが起きることも。肺炎や脳症等の重い合併症を起こし、乳児では死亡することもある。 	<ul style="list-style-type: none"> 土の中にいる菌が傷口から体内に入ることによって感染。日本中どこでも土中に菌があり感染する機会はある。 口が開かなくなったり、けいれんを起こしたり、死亡することもある。
破傷風	<ul style="list-style-type: none"> 土の中にいる菌が傷口から体内に入ることによって感染。日本中どこでも土中に菌があり感染する機会はある。 口が開かなくなったり、けいれんを起こしたり、死亡することもある。 	<ul style="list-style-type: none"> 麻しん・風しん混合ワクチン(生ワクチン) 麻しん及び風しんウイルスを弱毒化してつくったワクチン。1~2歳未満の間に麻しん又は風しんにかかる可能性が高いので、1歳になったらなるべく早く1期の予防接種を。 麻しんと風しんの予防接種を同時に行う場合は、麻しん・風しん混合ワクチンを使用。麻しん又は風しんのいずれかにかかった子どもにも混合ワクチンの接種が可能。 ガンマグロブリンの注射を受けたことがある子どもの接種時期については、かかりつけ医に相談。 4~6月の間に接種を。 
麻しん	<ul style="list-style-type: none"> 麻しんウイルスの空気感染によって発症。 潜伏期間約10~12日。主な症状は発熱、咳、鼻汁、めやに、赤い発しん。症状出現後3~4日は38℃前後の熱と咳と鼻汁、めやにが続き、一時熱が下がりがけたかと思うと、また39~40℃の高熱、発しんが出ます。高熱は3~4日で解熱し、次第に発しんも消失するが、しばらく色素沈着が残る。 合併症の主なものは気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎等。 極めて稀に亜急性硬化性全脳炎(SSPE)という重い脳炎を発症することもある。 	<ul style="list-style-type: none"> 風しんウイルスの飛沫感染によって発症。 潜伏期間約14~21日。主な症状は、軽い風邪症状で始まり、麻しんより淡い色の赤い発しん、発熱、首の後ろのリンパ節の腫れ等。その他、眼球結膜の充血等の症状も。子どもの場合、発しんも熱も3日程度で治ることが多く、三日ばしかと呼ばれることも。 合併症として関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎等。大人になってからかかると重症化する傾向がある。 妊娠早期にかかると、先天性風しん症候群という病気により、心臓病、白内障、聴力障害等の障害を持つ赤ちゃんが生まれることも。
風しん	<ul style="list-style-type: none"> 風しんウイルスの飛沫感染によって発症。 潜伏期間約14~21日。主な症状は、軽い風邪症状で始まり、麻しんより淡い色の赤い発しん、発熱、首の後ろのリンパ節の腫れ等。その他、眼球結膜の充血等の症状も。子どもの場合、発しんも熱も3日程度で治ることが多く、三日ばしかと呼ばれることも。 合併症として関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎等。大人になってからかかると重症化する傾向がある。 妊娠早期にかかると、先天性風しん症候群という病気により、心臓病、白内障、聴力障害等の障害を持つ赤ちゃんが生まれることも。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本脳炎ウイルスの感染で発症。 ブタ等の動物の体内でウイルスが増えた後、その動物を刺した蚊等がヒトを刺すことによって感染。 潜伏期間7~10日。高熱、頭痛、嘔吐、意識障害、けいれん等の症状を示す急性脳炎。
日本脳炎	<ul style="list-style-type: none"> 日本脳炎ウイルスの感染で発症。 ブタ等の動物の体内でウイルスが増えた後、その動物を刺した蚊等がヒトを刺すことによって感染。 潜伏期間7~10日。高熱、頭痛、嘔吐、意識障害、けいれん等の症状を示す急性脳炎。 	<ul style="list-style-type: none"> ヒブワクチン(不活化ワクチン) インフルエンザ菌b型による感染症を予防するワクチン。特に罹りやすい0歳時に予防接種を受けておくことが重要。接種は2ヶ月からでき、通常4回皮下に接種。
Hib感染症	<ul style="list-style-type: none"> ヒブ(Hib)とは「インフルエンザ菌b型」という略で飛沫感染によって発症。 ヒブが原因で起こる病気の主なものは髄膜炎、咽頭炎、肺炎、肺血症などがあり、中でも割合が高いのが髄膜炎。5歳未満の乳幼児がかかりやすく、0~1歳までは特にかかりやすいため注意が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 肺炎球菌ワクチン(不活化ワクチン) 小さな子どもにも免疫をつけられるように工夫されたワクチン。このワクチンは1回の接種で、特に2歳未満の感染症の原因菌として頻度の高い7種類の型に対して免疫をつけることができる。
肺炎球菌感染症	<ul style="list-style-type: none"> 肺炎球菌は免疫のはたらきが十分でない、乳幼児や高齢者に肺炎、気管支炎等の呼吸器感染症や副鼻腔炎、中耳炎、髄膜炎、菌血症などを起こす。 近年は抗生物質が効かない薬剤耐性菌が増えているため、治療が困難になっているという問題も。 	<ul style="list-style-type: none"> HPVワクチン(不活化ワクチン) HPVワクチンは2種類あり。いづれのHPVワクチンも3回接種することで十分な予防効果がみられる。 ワクチンによって接種間隔が異なるため要注意。全ての発がん性HPVの感染を防ぐものではないためワクチン接種後も20歳を過ぎたら定期的な子宮頸がん検診の受診が必要。
子宮頸がん	<ul style="list-style-type: none"> 子宮頸がんは、発がん性の高いHPV(ヒトパピローマウイルス)の持続的な感染が原因となって発症。 HPVの子宮頸部への感染はほとんどが性感染症によるもの。性交渉によって子宮頸部粘膜に微細な傷が生じ、そこからウイルスが侵入して感染が起これと考えられている。 このウイルスに感染すること自体は決して特別なことではなく、性交渉経験がある女性であれば誰でも感染する可能性あり。HPVの感染は非常に一般的なだが、子宮頸がん発症に至るのはごく稀。 	

接種対象年齢(接種の望ましい年齢)	回数	副反応
生後0か月~12か月未満 (できるだけ生後5か月~7か月)	1回	<ul style="list-style-type: none"> 接種10日後頃に接種局所に赤いぼつぼつ、一部に小さい腫れが、4週間後頃に最も強くなるが、その後はかさぶたができて3か月後までには治り、小さな傷跡が残るだけに。これは異常反応ではなく抵抗力がついた証拠。そのまま清潔を保てば自然に治癒。ただし接種3か月後を過ぎてもじくじくしているようときは医師に相談。 接種側のわきの下のリンパ節が稀に腫れることも。様子を見て構わないが、ただれ、大きな腫れ、稀に化膿も。このときは医師に相談。 既に結核に感染している子どもが接種した場合、接種後10日以内に接種局所の発赤、腫れ、化膿など強い反応が起き、2~4週間後に腫れがなくなることがある。この反応が見られた場合は区役所保健福祉課に連絡した上で、速やかに医療機関で受診を。(コッホ現象)
1期 初回 生後3か月から7歳6か月未満(12か月までに接種した方が効果的)	3回 (20~56日間隔)	<ul style="list-style-type: none"> 注射部位の発赤、腫れ、しこり等の局所反応が主だった副反応。 しこりは少しずつ小さくなるが、数か月残ることがあり。 通常高熱は出ないが、接種後、24時間以内に37.5℃以上の高熱になることが稀にあり。 重い副反応はなくても、機嫌が悪くなったり、腫れが目立つとき等は医師に相談。 
1期 追加 生後3か月から7歳6か月未満	1回 (初回終了後12~18か月後)	
2期 11~13歳未満(9歳)	1回	
1期 生後12か月から生後24か月未満(1歳になったらできるだけ早めに)	1回	<ul style="list-style-type: none"> 麻しん・風しん混合ワクチン 副反応の主なものは、発熱と発しん。その他としては、注射部位の発赤・腫れ、しこり等の局所反応、じんましん、リンパ節腫脹、関節痛、熱性けいれん等。 アナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、脳炎等の副反応が稀に起こることも。
2期 小学校就学前の1年間(幼稚園、保育所の年長児等)	1回	<ul style="list-style-type: none"> 麻しんワクチン 接種後5~14日に発熱、麻しん様の発しんが。通常は1~2日で消失。稀に熱性けいれんも。その他脳炎・脳症の発症も。 風しんワクチン ほとんど報告はないが、まれに血小板減少性紫斑病。 
1期 初回 生後6か月から7歳6か月未満(3歳)	2回 (6~28日間隔)	<ul style="list-style-type: none"> 注射部位の発赤、腫れ、痛みなどが主。ときに軽い発熱が見られることがありますが、いずれも一時的なもので、数日間で消失。
1期 追加 生後6か月から7歳6か月未満(4歳)	1回 (初回終了後11~13か月後)	
2期 9~13歳未満(9歳)	1回	
生後2か月から5歳未満(できるだけ初回接種は2か月~6か月)	4回 (接種開始年齢により回数が変わります)	
生後2か月から5歳未満(できるだけ初回接種は2か月~6か月)	4回 (接種開始年齢により回数が変わります)	<ul style="list-style-type: none"> 注射部位の腫れ、痛み、赤みなどがみられることがある。また発熱や筋肉痛などがみられることも。
小学6年~高校1年(中学1年)	3回	<ul style="list-style-type: none"> 注射した部分が腫れたり痛むことがある。通常は数日間程度で治る。気になる症状があれば、医師に相談を。 ※なお、本市においては、平成25年6月より接種の対象者又はその保護者への積極的な勧奨(個別の通知やお知らせ)を当面の間、差し控えています。(平成25年9月1日現在)